全ての民主的学友は
民学同に結集しよう

70年闘争特集号
NO.65
1970年1月20日発行

民主主義の旗

発行所
民主主義学生同盟全国委員会
編集局 振替（大阪）13014
大阪市阿部野区松崎町4—1—14
東京支局・新宿区荒木町5
<1部 20円、1ケ月 70円>

国際学連の旗の下
単一全学連を再建しよう

70年代の新たな闘いの展開へ

昨秋期闘争をふまえ佐藤内閣を打倒せよ

——沖縄・安保・大学——
闘いの総括と展望

民主主義学生同盟全国委員会

激動の時代—七〇年代が始まった。新たな飛躍の年にわれわれは突入した。われわれの敵—日本帝国主義は、敗戦後二十五年を待たずに資本主義世界で第二位のGNP（国民総生産）を待つ帝国主義国家に「発展」し、海外侵略への道を暴進している。しかし、われわれは、帝国主義が、「資本主義の最高の発展段階」であると共に「死滅しつつある資本主義」であることを知っている。次の時代の主人公が一体誰であるのか、歴史の発展を促進するのは誰なのか〝進歩〟という言葉を語りうるのが誰なのかを、われわれは知っている。日本帝国主義は、その「発展」の早さにおいて世界の帝国主義者の驚異的となった。しかし、われわれはそれを驚きもしなければ怖れもしない。われわれはただ、彼らの死に至る肥大とその病状の悪化を鋭く見極め、その死を早めるために闘うのみである。日本帝国主義の帝国主義世界体制内部での相対的発展にもかかわらず、国内に矛盾は累積し、労働者階級を中心とする反独占諸階層の反撃は昂まっている。外に眼を転ずれば、帝国主義者はベトナムで今まで彼らの陣地を明けわたさねばならなくなった。ベトナム人民は革命政府を勝ちとった。寡黒は猫をかむという。帝国主義者は、追いつめられればその策動を激化させるだろう。味方は一定の犠牲をはらうかも知れない。しかし、再度言おう。明日はわれわれのものである。

(1)
反帝平和勢力の前進
—国際情勢の動き—

六七年のポンド切下げ以後、国際情勢はIMF体制の根本的動揺を中心に急転回を遂げてきた。とりわけ六八年に入ってからのベトナム反戦闘争の勝利的展開は、世界の平和勢力の厳然たる存在とその闘うの躍進を確立せしめた。そして、これと並行しての仏・伊・西独・英国での反独占闘争の昂揚は、各帝国主義国間の利害衝突を一層煽動し、慢性的国際通貨危機は戦後帝国主義世界体制の根底からの再編成以外の、いかなる脱出路をも持ち得ぬ状態にまで到ったのである。われわれはこれを〝金融的危機の第三段階の一層の深化〟としてとらえてきた。

六九年は、こうした動きを背景に、アメリカ帝国主義にそのあらゆる急激的策動にもかかわらず現実にベトナムからの撤退を余儀なくさせると共に〝平和と平和共存〟の更なる前進を明らかにしたのである。

その第一は、アメリカ独占資本内部の最も反動的部分を代表するニクソンすらが踏み切らざるを得なかった対中国接近政策（対中貿易規制の緩和、第七艦隊の行動縮小など）であり、SALTを中心とする軍縮交渉の再活発化である。

また、難航を見せているとはいえ、イタリア・カナダの対中国国交正常化交渉もこうした国際的動きの端的な反映といえるだろう。

第二は、最も好戦的な政策を持してきたところの西独での政権交替、すなわち核防条約調印・社会主義ドイツとの緊張緩和・対ポーランド国交回復を掲げるブラントの「柔軟」な対社会主義政策の登場である。もちろんわれわれはこうした政策自身、帝国主義者がそこにそれなりの利益を見出していることには相異ない点を確認しつつも、驚愕な戦争政策から現実に手を引かせ、彼らの策動の分断をより狭隘化させてゆくところに平和共存の力の作用と、われわれにとってより闘いやすい条件の獲得をはっきり確信することができる。

こうしてわれわれが今踏み込んだところの七〇年と七〇年代の世界は、一言で言うならば全世界的な反帝闘争が一層その比重を増しつつ、その勝利と前進が益々社会の根底からの変革の道を明らかにしてゆく時代と言えるだろう。

それはベトナム人民の解放闘争の勝利を機とするところの、全世界的反帝平和の力を背景とした

(2)
70年への日帝の策動
—国内情勢の動き—

日本独占・佐藤内閣は、十一月日米共同声明と総選挙での議席増によって七〇年闘争切り抜けと七〇年代への「強い環」としての進出の地歩を彼らなりにうち固めつつあるとうそぶくだろう。彼らは日米共同声明において「韓国」＝台湾＝インドシナの日本の「安全範囲」としての確定、沖縄の「有事核持込み・自由出撃返還」と全面的な対東南アジア「経済援助」の公言によって〝核安保〟・〝アジア安保〟の出発点を構築した。米韓・米比・米台各軍事同盟と日米安保を有機的に結合させることによる多角的反共軍事網への日帝の〝協力〟へ衝動を強めていることを底流として、国内世論への配慮と七〇年闘争を自ら充満する有利と見たうえで、沖縄の「国民的合意」・「解決」を急いだことろに起因するだろう。同時にこれは、米帝の覇権争奪戦を見越した上で、政治・軍事面での抗争を今から露わにするより当面は東南アジア進出を公然と認めさせることを優先させたことによるものである。

しかしながら、米帝の対中接近緩和の徴候と前後して松村訪中の動き（共同声明の中国敵視とならび立たない！）があるなど、決して安定的な一貫した政治姿勢と見ることはできない。

日本独占の七〇年代への展望は、防衛面では有田防衛庁長官の四次防への見解（局地戦自力対処・海軍強化・攻撃体制への転換・兵器の自主開発）に象徴的であり、完成された帝国主義軍隊の完備へと急速に歩を進めている（四十五年度防衛予算は18%増と予定されている）。

そして全体的には、政治・経済・軍事全般にわたる帝国主義的再編、すなわち国際競争の波にうち勝つための大型合併・再編成「合理化」、大学の帝国主義的再編＝新構想大学（四月中教審答申）、高率搾取と資本蓄積増化のための賃金凍結、中小企業の切り捨て・系列化、流通部門の「近代化」、農業の「合理化」（六九年経団連定期総会決議）である。

またイデオロギー的には、今選挙で不安定ながら一応議席数において国民を国防・沖縄「返還」の周囲に結集させたことを踏まえて、北方領土問題を次の武器として一層の民族主義・排外主義的気運を醸成し、同時に社会党敗北を機にしての総評の切り崩し＝民労協・JC「同盟」の育成、企業内教育の強化を押し進めてくるだろう。

以上の動きは既に「返還」後の沖縄「防衛」（自衛隊配備）として現われている。彼らはこれを沖縄「返還」の実態が暴露されその

時点での敵二年をメド
議的に先行
しているのの
今や日本
資を通ちか
本主義世界
位の輸出力
と対日依頼
アジアの
確保を急進
こうした
縄において
更にまた大
をめぐって
せている。
らの策動を
に進行させ
それは更に
済的衝突を
ないのであ
の闘いの場
学の闘う連
占との全面
機があるこ
ねばならな
今選挙に
席は増した
低下してい
的に敗北的
が、自民党
せたことは
ねばならな
批判的な大
らせその進
危険な傾向
ある。これ
がかつてな
れ自身とし
議会をも強
強化してゆ
ったこと、
衆闘争との
会党の組織
われ反独占
限の弱さを
して徹底す

階級と一部
である。たと
宅・都市整
めぐって労
反独占勢力
いる。すな

六九年秋
言う〝七〇
の一過程と
は言うまで
また、とり
は、六八年
争の過程と
り、われわ
めぐる闘い
いが共に日
格的展開と
全面的な帝
中で同質の
育機的連関
闘ってきた
六九年秋
にとっても
を中心とす
ても、重要
であったこ
八月「大学

(3)

民学同全国集会
—七〇年代の闘いを展望して—
日時 一月二八日午後六時より
場所 大阪府立青少年会館
（旧厚生会館）
環状線・地下鉄森ノ宮駅下車西歩五分
主催・民主主義学生同盟全国委員会

七〇年の学生戦線　その1

阪市大闘争の現段階

――その総括と展望――

大阪市大支部委員会

全国の同志ならびに学友諸君！昨秋期安保・沖縄・大学闘争を最も大衆的戦闘的に闘い抜き、自らの隊列を強化しわが同盟大阪市大支部は、激動の七〇年代闘争を勝利的に闘い抜くと共に、その過程で不抜の同盟を大阪市大に確固として建設することを固く決意し、ここに そのアピールを発する。

市大闘争の牽引
同盟発展の基礎を確立

わが同盟大阪市大支部は、10・21国際連帯統一行動、佐藤訪米阻止闘争を軸とした昨秋期安保・沖縄闘争を最長も果敢に闘い抜いてきた。

10月20日授業再開という極めて困難な状況下において、全市大一五〇名の圧倒的な隊列を創出し、10・21全関西学生共同闘争実行委員会の旗の下、二〇〇〇名の学友と共に総評労働者と連帯し、10・21統一行動を闘い抜いた。この闘いの成功の基礎は、第一に10・21闘争を七〇年闘争の重要な一環として正しく位置付けたことにあり同時に闘いのスローガンを〝安保破棄・沖縄基地撤去即時全面返還〟を軸に明確に提起したことにあった。第二にそれは、学生戦線の分裂、自治会の統一機能の崩壊という極めて困難な特殊な条件の中で、唯一正しい組織路線である〝課題と基本戦術の一致による共闘〟を提起したことであり、第三に総評労働者との連帯という基本的な方向性を打ち出したことにある。と同時に、これらの点を積極的に学友に訴えるために展開された諸活動、平和委員会による映画討論集会〝10・21学生共同闘争市大実行委〟による学内集会等が、闘いの前進に大きな役割りを果たしてきた。

この10・21闘争の成果を受けた形で展開された昨秋期最大の闘いである佐藤訪米阻止闘争を、われわれは全力を賭して闘い抜いた。11・13闘争全市大一〇〇名、11・16―17現地中央闘争派遣数十名の闘いは、それらを全くネグレクトした民青派の徹底した右翼日和見主義と、鉄パイプ・火炎ビンに象徴されるトロツキー主義諸派の極〔左〕日和見主義を実質において粉砕し、市大の地における不動の陣他を獲得したといえるであろう。

この佐藤訪米阻止闘争の過程に登場したいわゆる〝ノンセクト〟を中心として形成された11・13（6・20）実行委について付言するならば、全国的にみても闘いの大衆的基盤が崩壊している中での積極的な闘いとしてこれを評価しつつも、にもかかわらずその本質が無原則的な学内「統一戦線」である点で決定的に不充分であろう。

すなわち、闘争方針にあっては、闘いの過程でわれわれが積極的に論点とし、批判した10・21闘争における屠町集会への参加＝「北大阪制圧」闘争への加担、あるいはその後の闘いの過程で明らかなように、ルンプロ集団＝地区反戦との共同行動等、闘争の基本的方向に関する逸脱が指摘される。また、「とにかく学内左翼勢力の統一を」という、内容を抜きにした「学内統一戦線至上主義」の組織性格では決して今後の闘争を闘い抜くことは不可能なのである。七〇年代の層としての学生運動再建の現実的基礎は、それを担う主体の建設、すなわちわが同盟の不断の建設・強化と、持続的闘争委員会の確立＝わが同盟のまわりへの大衆の結集によってのみ可能なのであり、われわれは断固として この道を邁進するとともに、徹底した討論と相互批判の中で11・13実行委に結集していた多くの学友をわれわれの隊列に迎えるであろう。

闘争収拾に反撃
ストライキ闘争展開

かかる闘いに並行して展開された大学闘争をも同時にわれわれは闘い抜いてきた。

10・4機動隊導入抗議闘争、それに引き続く一連の闘い、また11・26に始まる団交を中心とした闘いがそれである。10・4機動隊導入に抗議する理工系の教員、院生学生を中心とした五百名の座り込み闘争、あるいは当局による検問の突破闘争は、当局の収拾路線に対する粘り強い闘いとして大きく評価されねばならない。授業再開を討論に切り換えていったわれわれの闘い、学生の闘うエネルギー・26団交をかちとった。この団交で暴露された当局の反動性に対する学友の怒りは、機動隊導入自己批判、教室に機動隊を導入した柿木理学部長辞任等、五項目要求貫徹の団交要求闘争として全学化した。この闘いの高揚は、12・8全学学生大会、12・9全学スト、12・12全学学生大会、12・17大学法適用粉砕全大阪統一行動等を圧倒的に成功させつつも、残念ながら未だ五項目要求貫徹には至っていない。われわれは、かかる中で提起されてきた「団交路線破産→実力闘争」という一部の見解を全共闘の再版として批判しつつ、また、全共闘が支持を得ている時は民青を反革命と規定し、闘いが困難になるや「半日授業・半日討論」を、学友が闘いに決起するやいなや無期限ストを提起するといった破廉恥な大衆追随を暴露した一部諸君を実践的に克服してきた。

これら一連の秋期闘争の過程で、わが同盟は、とりわけ一回生の間に着実に基盤を確立すると共に、そこにおける多数の諸君を同盟に結集させることによって自らの隊列を圧倒的に強化し、同盟の更なる発展への基礎を確立した。

戦闘的自治会の再建へ

疑いもなく七〇年代は政府独占の一層の反動化とそれに対決する反独占闘争の高揚として進展するであろう。沖縄全軍労の48時間ストによって開始された七〇年代反独占闘争を、われわれはこの市大の地において、中核審答申とその再編を軸とする大学の帝国主義的再編を粉砕し、安保沖縄闘争を闘い抜く反戦平和の砦を構築することによって勝利的に闘い抜くであろう。

その過程の中で、かかる闘いを支える戦闘的自治会を再建し、それを担いうる不動の同盟を建設するであろう。

既に開始された一月闘争の中で、われわれは昨年末の五項目要求貫徹の闘いを継承しつつ、さらに予算獲得闘争、処分阻止闘争を付与し、中教審答申の実質化を阻止していく闘いを、〝平和と民主主義をめざす学生共闘会議〟を結成し、団交を実現していく過程で貫徹するであろう。

全国の同志諸君！大学の徹底的民主的改革闘争、更には佐藤訪米阻止闘争＝沖縄・安保闘争をわが同盟と共に一貫して最も戦闘的かつ大衆的に闘い抜いた全ての学友諸君！そしてわが同盟の発展のために、積極的援助を惜しまなかった全ての労働者・支持者の皆さん！同盟全国委員会は、一九七〇年および七〇年代闘争の本格的・全面的展開に際し、闘いの挨拶を送る。

一九六〇年代後半、世界資本主義体制の動揺と再編成の激動の中で、東大・日大を頂点とする全国学園闘争は、日本独占による教育の帝国主義的再編を阻止し、独占の支配構造に揺撃を与えるべき闘いであった。わが同盟は、帝国主義支配体制の動揺・再編過程における日本帝国主義の地位・比重の急速な増大が、日帝の本格的対外進出に拍車をかけ、中小企業切捨て＝集中合併を主軸とする産業再編成「合理化」攻撃に見られる収奪強化を遮二無二推し進め、それに見合った教育体制の再編を全面的に開始すること、現在の大学闘争は、まさにかかる独占の意図を粉砕し、大学を反独占の砦に変革する徹底的民主的改革闘争であることを主張して闘い抜いた更に〝大学闘争＝封鎖＝暴力学生〟のキャンペーンで情勢の右への流動化をはかり、沖縄問題を自己に有利に展開せんとした政府自民党＝独占支配層に対して、「核抜き・本土並み」は、実は「核付き・自由使用返還」をもくろんだものであることを暴露し、佐藤訪米阻止＝沖縄基地撤去・即時全面返還の闘いをつきつけ、迂回を必死になって画策する「沖縄・安保」問題を政治過程の前面に引きづり出した。

七〇年および七〇年代闘争は、まさにかかる八大学＝沖縄＝安保〟の基底を貫く矛盾、すなわち帝国主義日本の反人民的支配、搾取収奪を許すのか、帝国主義支配にクサビをうち込み闘う反独占統一戦線の不抜の基礎をうち固めるのかをめぐる、われわれの全力を賭した闘いである。

情勢は緊迫の度を益々強めている。大学闘争は権力の強権的介入の前に一時的後退を余儀なくされ総選挙における社会党の大躍進及びファッショ的要素を色濃くもつ公明党の進出、自衛隊の治安出動訓練は極めて危険な状況を呈し、警察・機動隊は戦前の〝治安警察〟をほうふつとさせる。

以上の諸論は、わが同盟が、厳格なる思想性（＝党派性）と科学性、不退転の決意をもって前進する比類なき戦闘性、大衆性を具備した強固な政治同盟として自己をうち鍛えることを要求している。これらこそ、七〇年闘争を徹頭徹尾闘い抜く者に要求される資質である。

わが同盟は、一九六八年三月、同盟内一部のネオ・トロツキズム的部分の脱落の中で組織・大衆運動の両面において極めて大きな困難を経験して以来、民主集中性の強化と「意見の相異は共通の実践と共同の民主的討議の中で解決する」という原則を貫き、全国委員会を先頭とする同盟の戦闘的統一を全力をあげて守り発展させてきた。今日の組織拡大・新支部建設「民主主義の旗」の発行等の組織量の増大、関西を中心として学生運動における不抜の影響力は、まさにその成果としである。大学闘争、沖縄・安保闘争においてそれらは一層強化された。

昨今、〝新左翼〟諸派や一部のブルジョアジャーナリズムは、皮相な観察のもとにわが同盟の分裂をとなえることに口にしている。われわれは、意見の相異はわが同盟が民主的学生の結集体である以上、当然あり得ると考えている。そしてレーニンも述べていることく、歴史的激動の時代においては避け難いことですらある。問題は、存在する意見の相異を如何にして解決するかにある。われわれは、全国委員会の指導の下、共通の実践・共同の民主的討議を通じてより高い次元で克服し戦闘的統一をうち固めることそのための同盟内民主主義の保障と民主集中性の貫徹こそ唯一の解決形態であると考える。すでに全国委員会の指導の下にわが同盟は七〇年代への飛躍を開始した。

われわれは以上の確認にそったあらゆる問題提起、討議を無条件に擁護し発展させると共に、それ以外の同盟を弱体化させんとするいかなるもくろみ決して許さず、同盟全国委員会を中軸とする戦闘的統一を固持し、七〇年闘争を担い得る資質を強固にうち鍛え、層としての学生運動の全国的指導部隊としてわが同盟の重責を果たしてゆく決意である。　全国の民主的学友諸君！　民学同の旗の下に結集し、われわれと共に闘おう！

全国委員会の旗の下、わが同盟の戦闘的統一をうち固め70年闘争を闘い抜こう！

民主主義学生同盟全国委員会

中教審特別委報告発表
大学の目的別再編へ
帝国主義的大学再編の一環

長期に渡って闘われてきた全国学園闘争の強権的圧殺と総選挙における自民党勝利という背景の下に中教審は大学再編成の具体案＝その骨子を決定発表した（一月十二日）

この案には大学の格差付け（複線化）教育と研究の分離等大学における教育研究の本質を破壊する意図が露骨に示されている。我々は再度大学の反動的再編粉砕の闘いを組織していく為、この案に示された独占資本の政策を明確に把握し、攻撃すべきは何であるかを今一度はっきりと確認する必要がある。

中教審の基本構想の最も特徴的な点は「高等教育機関の種別化」である。試案は戦後大学の画一性を打破すると称し、今後は六種の型に大別しようとしている。

「第一種」は社会で役立つ専門的な教養を身につける教育機関（一般大学）「第二種」は特定の専門について資格、能力をつける教育研究機構（専門大学）「第三種」は現行の短大「第四種」は現行の高専「第五種」は主として社会人の再教育をする教育研究機関（研究大学）「第六種」は博士課程をもつ教育研究機関（大学院大学）の以上、またこのような複線化、即ち格差付け再編成のみならず研究専門の教員を組織的に分離すること、教員人事に学外者を含めた資格審査制度を設けること、国立大と政府との結びつきを明確化すること等が提唱されている。

複線化については、一九六二年大管法作成当時あるいはそれ以前から戦後大学の画一性を打破しなければならないという要求が目白連等独占企業の代表から出されていた。しかしながら個性の尊重という事が不平等や差別を意味しない為には、先ず画一的に全ての者に平等の権利と権利行使の条件が与えられなければならない。中教審のいう画一性の打破は六種の「高等教育機関」が能力に格差のある、従って現代の社会において

衆院総選挙
自民党議
沖縄全軍労48時間ストに集う

いわゆる「七〇年代」の選択をかけたものとして、加えて、我々にとっては「反安保勢力の前進」を獲ち取るものとして、ひいて言えば、議会における「反独占勢力の増大」をはかるものとしてあった。総選挙は、表面上我々の期待に相反する結果をもたらした。

即ち、自民党が、前回総選挙の当選者を十一議席も上回り、保守系無所属で当選し、自民党所属が決った十二人を加えると三百議席に達するという圧倒的強みを見せた。また（北海道三区）を含む二三の地区で全議席を独占。これに反し社会党が、前回当選議席から四十四議席減って九十一議席に転落するという記録的大敗を喫したこと（青森県、山口県の全滅をはじ

は企業によって選別され差別されている労働者の搾取を至上命令としていることが明らかなように、平等な条件の打破と同義語なのである。大学とは我々の労働力としての側面のみを育成する機関ではない。少なくとも労働者・学生は労

千二百人にのぼる大量解雇撤回を要求する全沖縄軍労組（上原康助委員長、二万二千人）は八日午前零時から第一波四十八時間ストに突入した。一昨年四月、昨年六月の二十四時間ストに次いで三度目のストだが、二日間にわたったのは初めてであり、沖縄本島の各米軍基地にかなりの影響を与えた。

七日夕方からおもなゲートにピケ要員を配置し米軍側の呼びかけ要員を配置し米軍側の呼びかけ圧倒的強い上りのうちに二日間にわたるストを貫徹した。中でもスト突入に先立ち行なわれた第一波実力行使決行総決起大会において、中教審答申とその

の地において、中核審答申とその適用を軸とする大学の帝国主義的再編を粉砕し、安保沖縄闘争を闘い抜く反戦平和の砦を構築することによって勝利的に闘い抜くであろう。

その過程の中で、かかる闘いを支える戦闘的自治会を再建し、それを担いうる不動の同盟を建設するであろう。

既に開始された一月闘争の中で、われわれは昨年末の五項目要求貫徹の闘いを継承しつつ、さらに予算獲得闘争、処分阻止闘争を付与し、中教審答申の実質化を阻止していく闘いを、〝平和と民主主義をめざす学生共闘会議〟を結成し、団交を実現していく過程で貫徹するであろう。

京都郊外に集う
同盟全国交歓会

去る十二月二〇日―二十一日の両日、京都郊外三鈷寺において、同盟全国委員会主催の下に「民主的学友の全国交換会」が行なわれた。

当日は、全国の同盟員および同盟を支持する学友が二〇〇名以上参加し、〝七〇年〟へ向けての講演と討論に加わった。新たな激動の年〝七〇年〟を直前に控えて、参加した同志および学友の白熱した論議が京都郊外の山寺に繰りひろげられたのである。

第一日目は、まず佐藤全国委員長の挨拶があり、その後同盟各地方の闘いの報告が行なわれた。とりわけ、東京・名古屋・金沢などの地方の報告は、参加者に大きな共感を呼んだ。

その後、大阪市大院生の人氏による国際情勢とりわけ現在の国際通貨危機をテーマとする講演があり引き続いて討論が行なわれた。

夜は〝文献のタベ〟がもたれギターを伴奏にしての歌唱、大学でとによる寸劇などに興じた。

翌日は午前中、佐野氏のイデオロギー問題を中心とする講演と討論があったが、講演は昨近のブルジョアジャーナリズムによる近代主義の横行への厳しい批判から恋愛論まで飛び出し、真剣な中にもなごやかな雰囲気がかもし出した。

午後は、太田氏の教育部門における情勢と闘いの講演と討論があり、四時すぎすべての日程を終えて下山した。参加者は、尽きないなごりを惜しみながら新たな年への決意も新たに各地へと散った。

【写真】全国交歓会に結集した学友（12月20日・京都）